

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370236

研究課題名(和文) 後期萬葉長歌における教養基盤と表現形成の研究

研究課題名(英文) A study on cultural foundation and expression formation in the long poetry of later Manyo-syu

研究代表者

奥村 和美 (okumura, kazumi)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：80329903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『萬葉集』の、平城京遷都以降の後期萬葉の長歌、特に大伴家持の長歌を主たる対象とする。

大伴家持の長歌「橘歌」について、類歌と言われてきた聖武天皇御製と比較検討することによって、御製を意図的に敷衍し橘氏を寓意する歌であることを明らかにした。また、中国文学から表現の方法や形式を受容した過程を分析し、初学書『千字文』が利用された一端を明らかにした。さらに、平安期の『萬葉集』長歌の受容実態を、藤原定家の作歌の詳細な分析を通して解明した。

研究成果の概要(英文)：A study on cultural foundation and expression formation in the long poetry of later Manyo-syu .

This study is directed to the late Manyo-syu, in particular a long poetry of Ootomo Yakamochi. This study is revealed that he have learned to the representation of Emperor Shomu. This study is analyzed the process that received form and method of Chinese literature, and revealed that the primary textbook Senjimon was utilized. This study tried to elucidate reality of acceptance in the Heian period of the long poetry of Manyo-syu through Fujiwara Teika's poetry.

研究分野：上代国文学

キーワード：萬葉集 大伴家持 長歌 初学書

1. 研究開始当初の背景

『萬葉集』4500余首の中で、長歌は260余首を占めるように、長歌は『萬葉集』の一大特色をなす和歌の形式である。長歌は、五七を2句以上繰り返し五七七で収める形式で、句数に制限はない。長歌は、初期萬葉(～壬申の乱[672]まで)の揺籃期を経て、萬葉第二期(～平城京遷都[710]まで)の柿本人麻呂において定型としての完成と叙情詩としての達成を迎えたとするのが今日の一般的な理解である。その後、第三期(～天平5年[733]まで)・第四期(～天平宝字3年[759]まで)と詠作の場の減少とともに徐々に長歌数は減少し、平安朝以降はほとんど詠まれなくなる。その第四期にあって、46首という比較的多くの長歌作品を残したのが大伴家持である。

萬葉和歌史の最後尾に位置して、家持の長歌は、平板、冗長、散漫、陳腐というような否定的評価を受けることが多く、柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良らの長歌の模倣に終始しているというのが共通した見解である。

しかしながら、家持が、長歌において新しい試みをいくつかなしたことも事実である。中でも注目すべきは、すでに科研費基盤(C)2011年～2013年、課題番号23520222「後期萬葉長歌の和歌史的研究」(研究代表:奥村和美)によって明らかにしたように、中国詩文からの積極的な受容である。例えば、越中の立山のような万年雪の積む雪山を長歌の素材とする際に、先行する赤人歌を模倣踏襲するだけでなく、中国詩文の高峻な山々を詠む「賦」の表現やその方法を巧みに取り入れている。中国詩文から語彙を摂取するだけでなく、「賦」、或は「詠物」の表現方法を摂取することは、長歌の内実そのものを変質させる大きな契機となったはずであり、そのことを作品に則して明らかにしなければならない。

またそのような中国詩文の受容において、表現の源泉となったものの中に、初等の識字教科書である『千字文』や初唐伝奇小説『遊仙窟』があることも明らかにした。つまり、これら実用書・通俗書の影響の実態を、通時的共時的視点に立って綿密に跡付け、『萬葉集』全体の中で正確に位置づけることも必要であろう。

2. 研究の目的

本研究は、『萬葉集』の第三期・第四期いわゆる後期萬葉の長歌、特に大伴家持の長歌表現を主たる対象とする。大伴家持の作品研究は、いまなお短歌中心の傾向があるが、あえて長歌を中心に据え、その表現の基盤をなした教養、すなわち柿本人麻呂作歌をはじめとする先行歌の表現、加えて中国詩文の語彙や表現方法等を受容していった過程を分析する。そのことを通して、奈良朝の知識人が

教養として持っていたものを和漢にわたって広く明らかにするとともに、それが一人の歌人の中でどのように和歌表現へと形成されていったのか、その道筋を考察する。

3. 研究の方法

研究方法は、大きく次の3つのアプローチからなる。

【類歌・類句の再検討】

家持歌の一つの特徴として、先行歌句の利用ということがある。これが単なる模倣であるのか、或いはそこに何らかの工夫が施されているのか、見極めることが長歌研究においても重要である。特に長歌においては、家持が手本としたであろう人麻呂や赤人や憶良らの先行長歌の利用を、発想・主題・文体・語句などの様々なレベルで検討する。また、家持自身の歌においても、先行作品の利用のしかたを検討し、家持作歌相互の内的関連をたどる。

【中国詩文からの摂取についての検討】

家持長歌の一部が、中国文学の「賦」や「詠物」から強い影響を受けて成立したことは、諸家によって指摘されてきたとおりである。しかし、萬葉和歌と中国詩文との比較研究は概して語彙の調査が中心になりがちである。その反省に立ち、本研究では、一首の発想、構成、修辞、表現方法についても綿密な検討を行う。特に、家持自身が「賦」と称した長歌を作った越中期の長歌作品についての検討が有効と考え、それらを対象として検討を進める。

また、いわゆる四書五経や正史或いは詞華集『文選』のような第一級の典籍だけではなく、初学書や書儀などの実用的な文献にも目を向ける。これらの中にはすでに中国本土で亡失したものも多数含まれるが、敦煌文書や逸文等丹念に資料を収集し、日本側では正倉院文書や出土木簡にも目を配ることによって、奈良朝知識人の教養を幅広く捉える。

【大伴池主の長歌作品との比較対照】

家持の越中守時代の長歌を検討する上で、歌友であった大伴池主の長歌作品との比較対照をおこなう。このアプローチは、の【類歌・類句の再検討】ということと重なりつつ、単に先行表現の受容にとどまらず、贈答の実際に即して池主から家持へ、家持から池主へという歌人間の相互影響を動的に捉える。なお、【中国詩文からの摂取についての検討】とも関連して、家持池主の共通の教養であった中国詩文、たとえば初唐伝奇小説の『遊仙窟』などの俗書をも含んだ中国詩文についての知識の利用のしかたを考察する。

4. 研究成果

《26 年度(2014)の成果》

【中国詩文からの摂取についての検討】を中心におこない、初等の識字教科書『千字文』の利用について、いくつかの例を通して具体的に明らかにした。『千字文』は、『萬葉集』の漢字表記における文字選択のレベルだけではなく、書翰といった実用的な述作の場においてもしばしば利用されていたことを指摘した。そのことを通して、『千字文』が識字のための教科書として上代知識人の教養の基盤をなしていただけでなく、さらに高度な文学的表現へと橋渡しする役目を果たしていたことがわかった。つまり、『千字文』が上代日本において『藝文類聚』や『初学記』のような類書に近い位置にあったことがうかがわれ、家持や家持周辺の和歌表現を考察する上で、『千字文』をその注も含めて検討し直すことが、より直接的な出典を究明することにつながるという見通しを得た(論文)。

《27 年度(2015)の成果》

【類歌・類句の再検討】の観点から、大伴家持の長歌「橘歌」(18・4111~4112)の検討を行った。特に、これまで単に類歌としてのみ捉えられていた聖武天皇御製(6・1009)との特異な関連を明らかにし、橘氏賜姓の際の聖武の賀歌を敷衍する内容であることを明らかにした。そしてそこに、13 詔をはじめとする聖武天皇のことばを踏まえる家持の作歌方法と、そのことを通して暗に橘氏を比喻する、表現の寓意性を析出した。また、橘を長歌で詠むにあたって、「橘頌」などの中国詩賦の方法を積極的に摂取していることについても指摘し、寓意的表現との関連を考察した(論文)。

また前年に続いて、【中国詩文からの摂取についての検討】の観点から、中国初唐の通俗小説『遊仙窟』の上代日本における受容のしかたを考察した。『萬葉集』の左注などの散文部分や家持の和歌作品、或いは『続日本紀』所収の「表」などの散文について、小説としての伝奇性への興味はそれとして、一方で、『遊仙窟』の華麗であるとともに通俗的類型的な表現が、作文のための実践的教科書として利用されたことを明らかにした(論文)。

《28 年度(2016)の成果》

引き続き【類歌・類句の再検討】と【中国詩文からの摂取についての検討】を行い、いくつかの成果を得た。

『萬葉集』前期の作品にさかのぼり、「藤原宮役民作歌」(1・50)の分析を行った。藤原宮の造営を具体的に描き、都に物資や貢上品や支配権が集中する様を表すことを通して、都が外部との関わりにおいて中心であることを詠むところに特色を有する歌であることを捉え、その描写の背後にうかがわれる中国詩文の知識が、類書のみならず、『千

字文』のような初学書を通して摂取定着していたであろうことを指摘した(論文)。

『萬葉集』後期、大伴家持の長歌「独居幄裏遥聞霍公鳥喧作歌」(18・4089)の中で、中国詩文に見える「心動」や「情動」に基づく翻訳語「心つごく」のあることを指摘し、さらに家持がその語を中国の詩論を典拠として用い、典拠に則して長歌全体の文脈も構成されていることを明らかにした(図書)。

26・27 年度の研究において、平安期の『萬葉集』長歌の受容実態の解明が大きな課題であることを認識した(論文)ため、それについての研究発表を行った。特に、廣瀬本と関わりの深い藤原定家において、建保期の『萬葉集』再発見の潮流の中で、新しい歌枕を発掘するために長歌に目を向け、先行する歌人による長歌表現の摂取を参考にしつつ、定家が直接『萬葉集』という書物に当たり直して表現の糧を得るとともに、訓も含めた『萬葉集』というテキストを新しい表現の拠り所としていたことを明らかにした(発表)。平安期の『萬葉集』長歌の受容についての研究は、平成 29 年度以降も、科研費基盤 C「和歌史における後期萬葉長歌の特質とその展開」(17K02416)において継続する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

奥村和美、「『萬葉集』にみる都造り」、奈良女子大学古代学学術研究センター『都城制研究』、依頼論文につき査読無、11 集、2017 年 3 月、85-95 頁

奥村和美、「書評 瀬間正之『記紀の表記と文字表現』」、『萬葉』、依頼論文につき査読無、222 号、2016 年 5 月、71-83 頁

奥村和美、「仙覚以前の萬葉集」、佛敎大学国語国文学会『京都語文』、依頼論文につき査読無、22 号、2015 年 11 月、26-46 頁

奥村和美、「『遊仙窟』から学んだもの」、『萬葉語文研究』、査読有、11 集、2015 年 9 月、101-120 頁

奥村和美、「大伴家持の「橘歌」 引用と寓意と」、『文学』、依頼論文につき査読無、16 巻 3 号、2015 年 5 月、80-95 頁

奥村和美、「『松浦宮物語』と『萬葉集』 卷五」、京都大学国語学国文学研究室『国語国文』、依頼論文につき査読無、84 巻 4 号、2015 年 4 月、99-114 頁

奥村和美、「『松浦宮物語』の擬古 『萬葉集』との関連をめぐって」、佛敎大学国語国文学会『京都語文』、依頼論文につき査読無、21 号、2014 年 11 月、52-66 頁

奥村和美、「出典としての『千字文』 『萬

葉集』の歌と文章 』、『萬葉』、査読有、
217号、2014年5月、21-32頁

〔学会発表〕(計5件)

奥村和美、「『萬葉集』長歌の受容一端
藤原定家の作歌を中心に 』、科研費
基盤C「後期萬葉長歌における教養基盤
と表現形成の研究」主催研究集会、2017・
1・22、奈良女子大学

奥村和美、「『萬葉集』にみる都造り 』、奈
良女子大学古代学学術研究センター主催
第10回都城制研究集会、2015・12・19、奈
良女子大学

奥村和美、「桜井市の萬葉歌碑 』、NPO
法人奈良まほろばソムリエの会、2015・9・
27、桜井市立図書館

奥村和美、「仙覚以前の萬葉集 』、第19回
佛教大学国語国文学会大会、2014・11・29、
佛教大学

奥村和美、「松浦宮物語と萬葉集 』、奈良
女子大学古代学学術研究センター主催第
11回若手研究者支援プログラム、2014・8・
30、奈良県立万葉文化館

〔図書〕(計1件)

奥村和美、勉強出版、『古典文学の常識
を疑う』、共著(本書のうち、「上代文学
はどのような古代日本語で表されてい
るのか」を執筆)、2017年5月31日、22-25
頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件) 無し

取得状況(計 件) 無し

〔その他〕

ホームページ等

奈良女子大学学術情報リポジトリ

<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace>

萬葉学会 <http://manyoug.jp/info>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥村 和美 (Okumura Kazumi)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：80329903

(2) 研究分担者 無し

(3) 連携研究者 無し

(4) 研究協力者 無し